

カトリック六甲教会 教会報

2009
10
No.454

「ひとつになろうキリストのうちに」

主任司祭 松村 信也

あの灼熱の夏が嘘のような朝夕の冷え込み、油断して体調を崩されないよう注意してください。そして今、世界中を震撼させている新型インフルエンザ、皆様におきましては予防対策出来ていますか。少し過剰とも思える報道ですが、この新型インフルエンザに対する予防対策のメッセージではないかと思えます。決して侮らないで、各自十分な予防策をお願いします。

さて早いもので着任後4ヶ月が過ぎようとしています。その間、皆様の種々の活動ならびに明日の教会に向けての勉強会を拝見しながら学ばせて戴いています。他の司祭も発言しているように、それらは確かに積極的なものであります。しかし、少し気になることがあります。それほど積極的かつ素晴らしい活動でありながら、小教区共同体の歯車と少し噛み合っていないということです。

その原因として考えられるのは、先ず「組織が大きいから」、第二に「忙しいから」、そして「興味が異なるから」と言った理由が挙げられるでしょう。確かに、現代社会において私たちは忙しい毎日を強いられています。それを避けることは出来ないのです。また組織、つまり共同体のスケールが大きくなればなるほど、皆と分かち合うことは困難を要します。十人十色と言われるように、人の興味も様々で「一つになって分かち合うことが無理なんですよ!」と言われるでしょう。しかし、「一つになろう」と提唱されるのは、私たち共同体の礎であるイエス・キリストであり、その『キリストによって、キリストと共に、キリストのうちに』私たちは一つになるよう召されており、キリストの共同体を構築していく使命を受けているのです。

その為には、仲良しグループの個の集団ではなく、その個を越えた“キリストに結ばれた一つに集められた共同体”であるべきなのです。キリスト不在の共同体、必要なときキリストを招く共同体と言う教会共同体ではなく、しっかりとキリストに根ざし、キリストから生きる力と方向性を発見する共同体こそ、私たちの共同体でなければなりません。

祈りから始まる積極的活動、奉仕、自己研鑽すべてはキリストに結ばれ、キリストと共に、キリストのうちに育まれ、すべてのことを皆で共感共有しながら、キリストの愛のうちに“交わり”を深め歩む姿こそ、キリストを“証する共同体”ではないでしょうか。



共同体の基礎となる地区会の姿



主任司祭 松村 信也

過日、着任後はじめて地区世話人の方々の集いに招かれ、皆様と話し合う機会を持つことが出来ました。驚いたことは、六甲小教区に59の地区会が存在しており、やはり大きな小教区であるということでした。

かつてキリシタン時代、コンパンヤ(Compania)・組仲間(地区会)はキリスト信仰に欠かすことの出来ない共同体でした。特に、キリスト教弾圧時代には、組仲間(地区会)が大きな役割を果たしました。互いの信仰を育むだけでなく、様々な報告、連絡、相談と言った日常的なものを中心とした事柄から、大事に至る事柄まですべて組仲間(地区会)がその役割を果たしていたのです。

明治政府に変わりキリスト教が再来日、新たに布教を開始しました。しかし、明治政府の規制からキリスト教伝来当初行われていた布教方法は、主に事業体を中心とした布教に変わりました。その後、事業体中心から小教区中心へと漸次移行し、近年に至っては小教区中心に司牧・宣教を行うようになりました。そして第二次大戦以降、教会の姿の移りゆく中、各小教区では、地区会が共同体活動の先鋒となり小教区発展の原動力となりました。

ところが経済成長と共に所属している地区のメンバーたちが多忙な生活を強いられたこと、また核家族化の時代に入った頃から次第に地区会の存在が希薄になり、漸次、各小教区から活動的な地区会の姿が見られなくなりました。その結果すべての事が、各小教区の中で扱われ、かつての先鋒的役割を務めた地区会は、その名残として小教区内に散らばっているのが現況です。言い換えるならば、かつての能動的な存在から受動的な存在に変様してしまったのです。

日本で生まれた地区会は、近年、他国(主にブラジル、中南米、フィリピン等)に採り入れられ、別称:キリスト教基礎共同体(Basic Christian Community)として発展し、教会、否、社会の中で大きな役割を果たし、益々その勢いは大きくなっています。

また地区会は、キリスト教社会だけでなく、日本の他宗教にも採り入れられ、有力某宗教団体では、これを基礎に地方に分散している共同体とのつながりの十全を計り、益々その勢力を伸ばしています。

さて何故、私たちの教会では、その基礎となる地区会が衰退の一途を辿ってしまったのでしょうか。その原因を知るために、もう一度、原点に戻って地区会の見直しと地区会の本来あるべき姿を確認しましょう。

イエスは弟子たちに向かって「隣人を愛しなさい」と語られます。これはイエスご自身が、神から受けた使命であり、その使命をイエスは全うするために、神の子でありながらも十字架刑に処せられ、そして三日目に復活されたのです。その神がイエスに託した愛とは、報酬として、また価値評価としてではなく、すべての人に平等に与えられるものであり、しかも無償に与えられるのです。

この人知を越える寛大さ、素晴らしさ、喜びを私たちは、独り占めするのではなく、大勢の人々と分かち合うことを求められています。だとするならば、今、たまたま共同体から離れている友、この世の忙しさで振り回され共同体どころではなくなってしまった友、しばらくご無沙汰している内に居場所がなくなったと思ひこんでいる友、意見の食い違い・価値観の相違から離れてしまっている友など、いろいろな友がまだキリストとの出会いを知らない人たちの中で彷徨っているのではないのでしょうか。彼らとの再会、また新たな出会いを作るためには、皆で声をかけ合いキリストに結ばれた友として、互いに赦し合いながら、戴いた信仰の道を共に歩むことが神のみ旨であると思います。

なぜなら、『信仰の道は、自分の思いから神の思いへの立ち返りを繰り返す努力の道』だからです。

イエスの弟子ペトロは、幾度も幾度も立ち返りを繰り返し、生涯かけてやっと主と同じ道を歩まれたのです。離れている人とコミュニケーションを取ることの難しさ、共通理解をすることの難しさ、ましてやキリストを知らない人と関わりを持つことの難しさは、確かに、一朝一夕に克服できるものではありません。しかし、日常生活の中でコミュニケーションを続けることによって、昨日よりは今日、今日よりは明日の違いを感じられるのではないのでしょうか。

コミュニケーションとは、「社会生活を営む中で人間同士が互いに知っていること、学んだこと、いろんな情報などについて、自分の言葉、文字、視覚、聴覚を使って感情と共に相手に伝えること」です。現代社会において、

このコミュニケーションの欠如、特に言葉による対話不足から沢山の誤解が生じて、殺伐とした人間関係になってしまっていることは自明です。

そこでイエス・キリストを頭とする私たちの共同体は、少なくともその問題を解決する人と人との“つながり”を愛の力で奉仕していく使命があると思います。そのためには先鋒となる地区会において先ず、横のつながりを大切にしながら戴いた信仰を分かち合うことが、キリストの望まれる共同体の姿ではないでしょうか。

キリストに結ばれた友、その友が、今、私の隣で私と同じように生活しておられます。その方々と知り合うことは、神の愛・キリストの出会いの喜びを共有し合う時に繋がらないでしょうか。地域社会の中でキリストによって「つながり」を確認し、キリストと共に「交わり」を深め、キリストとのうちに「対話」することは、神の証となる共同体を築きあげていくことにならないでしょうか。

「すべてに越えて、福音は『あかし』によって宣べ伝えなければなりません。」

(パウロ六世・使徒的勧告より)

祈りのうちに



松村主任司祭も参加された「地区世話人会」では、数時間にわたり熱心な意見交換がなされた。

地区会世話人会(9月12日)

橋岡

9月12日45名以上の世話人の方の参加を得て地区会世話人会が開催されました。

今回は松村神父様が主任司祭となられてから初めての世話人会であり、神父様をはじめ、評議会役員の皆様にもご出席いただきました。

第一部は軽食をとりながら互いの懇親を深める時間を持ち、普段は話すことができない世話人の方同士が地区会について自由に語りあうことができました。松村神父様も各テーブルを回って様々な意見に耳を傾け、直接世話人の方に地区会についてお話していただくという機会を持っていただきました。

第二部に入り、神父様による地区会の本来あるべき姿、目的などのお話を伺いました。現在私たちの六甲教会では評議会や各部会とは全く別の集まりのように認識されがちな地区会ですが、本来は教会活動のベースになるべきものであること、そしてそこから各部会ができていくのが普通の姿であることがわかりました。教会共同体の地区会として信仰の分かち合いをするのが大切であること、そして地区の全容を明らかにするために信徒の動静について調べる必要があること、そのなかから高齢者、病者など教会に来ることができない方もコミュニケーションをとる機会を作っていくことが地区会世話人に託された仕事であることが神父様の力強いお言葉で語られました。

続いて質疑応答が行われ、信徒の動静の確認作業について具体的な方法などの質問や、今までの世話人の方々の経験に基づくご意見などが活発にかわされ、予定の時間をずいぶんと過ぎるほどの意見交換がありました。

地区会については神父様から信徒全員に向けてその意味について改めての発信をしていただくことをお願いし、またその位置づけについても皆さんにわかっていただくよう、なんらかの形でお知らせしていくことになり、今回の話合いにもとづき、もう一度年内に世話人会を開催することを確認しての閉会となりました。

松村神父様のもと、私たちにとっては新しい地区会の形作りをすすめ、本来の地区会の目的を発揮できるよう進んで行きたいと考えを新たにしたい一日でした。

信徒の皆様にとってもわからないことも起こってくると思いますが各地区の世話人の方を通してご意見などをお伝えください。また今後の地区会の活動にどうぞご協力をお願いいたします。

📖 図書紹介

『ナザレのイエス』

教皇ベネディクト16世 ヨゼフ・ラツィンガー
早野 泰昭 訳

「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧、あなたをおいて誰のところに行きましょう。」この書物を読み終えて、思わず口を衝いて出たことばは聖体拝領直前に唱えるこの一節であった。

この書は序章の他10章から成っており、イエスの洗礼を1章として、2章・イエスの誘惑、3章・神の国の福音、4章・山上の説教、5章・主の祈り、6章・弟子たち、7章・譬えの使信、8章・ヨハネ福音書の主要な象徴、9章・イエスの道行きを画する二つの重大な出来事、10章・イエスの自己表明として述べられている。現代の有数の神学者(ユダヤ教のラビを含む)を引き合いに出しながら、「聖書のことばは教会の中において常に現存している」という事実を、緻密に、大いなる説得力をもって論証して行く。とりわけ、共観福音書とは異なる立場として「イエス詩」の如く扱われがちなヨハネ福音書を、「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち命の言について」と始まるヨハネの手紙によって、ヨハネとその弟子たちによる記憶と認識の書として示す章は、胸躍る思いで読み進んだ。象徴言語とされる水・パン・ぶどう・羊飼いやなどヨハネが意図したものではなく(文学的に表されたものでは更になく)、旧約のことばがイエスにおいて現実となって行ったことが思い起こされてそのままに語られていること、「譬えは過去のことと思われた物語から、突然に現在の聴衆の状況へとかわる」こと、更には今現在私たちの周囲で起こっている状況へと変わることから、現存するイエスをまさに体感させられる章である。最終章「イエスの自己表明」では、来るべき「人の子」とイエスの同一化へと進み、「イエスによって実際に生きられた無化(ケノーシス)と栄光に輝く彼の再臨との内的な一致は、イエスの行いと言葉の、生涯を通しての統一的なモチーフであり、正に新しいもの『真正にイエス的なもの』である」と締め括られる。そしてこれこそが今を生きる私たちの指針となるものだと思われる。

深まり行く秋に向かって、お手元に置いて頂くことをお勧めしたい一冊である。

(久野)

~~~~ 図書室より ~~~~

11月3日(火)までに古本市(バザー)用の古本とCD、DVD、ビデオを図書室までお持ち願います。

学習参考書、百科事典類、雑誌はお断りさせていただきます。
尚、集まった本の中から一部を図書室充実のために使わせて頂くことがありますので、何卒ご了承ください。



聖書朗読リレー 2009年8月29日(土)

本当に久しぶりで「聖書朗読リレー」に参加しました。初めて参加したときの、静かな中、みんなでただ聖書を読み継いでいくという体験はとても新鮮でした。そのときは旧約聖書の「シラ書」を読ませていただきましたが、初めて読む箇所、いかに聖書をちゃんと読んでいないかと思われられました。

今年は新約聖書のルカの終わりからヨハネの冒頭を読ませていただきました。15分ずつ読み継いでいくのですが、自分の前の方たち、後の方たちの朗読も聞かせていただきながら、様々な声で語られるキリストの言葉が、様々な人に話しかけておられる、という思いが自然としてきました。

ただ黙読するのとは、全く違う経験ができた気がします。この催しの企画や準備をしてくださった方たち、本当にありがとうございました。
(藤井)



三日月会総会 2009年9月21日(月) 敬老の日

9月21日(月)の敬老の日に、第30回三日月会総会を開催しました。8月末現在の会員は481名(男性132名、女性349名)で、教会内でも大きな存在となりつつあります。

今日の総会には、そのうち111名の方が参加され、13:00から安芸神父様とコリンズ神父様の共同司式によるミサを行い、その後松村主任神父様のビデオ「御大切(ごたいせつ)に」の解説と鑑賞会を行いました。このビデオは、松村神父様が山口教会に在任中にNHK山口局が制作した、山口教会を舞台にした40分足らずのドラマですが、三日月会参加者は本当に感動し、涙を流しながら拝見しました。松村神父様の解説によると、「御大切」と言う言葉はフランシスコ サビエルがキリスト教布教の時、当時は日本に「愛」と言う言葉がなく、「御大切」と言う言葉を使ったことからきたそうです。「自分を犠牲にしても、他人を大切にする」それは「愛」に通じるからです。ビデオ鑑賞の後、場所をイグナチオホールに移して懇親会。10のテーブルを設けましたが、満席状態で、各テーブルとも笑い声や話に花が咲き、3時間近い集りも大盛況のうちに終わりました。
(堀川)

※ NHK 山口局制作の「御大切に」のDVDを借りたい方は、松村神父様か事務受付にお申し出下さい。



ビデオの解説をされる松村神父



懇親会は大盛況。会場にあふれんばかりの三日月会会員の皆さん

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞ 各部だより ∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

📖 三日月会

10月の行事予定は特にありません。

📖 婦人会

10月2日(金) 初金ミサ後 11:15 よりトップ会
(バザーに向けて)
第一会議室

📖 壮年会

年内の行事予定 ()内はプロモーター名

1. 10月18日(日) 12:15~14:00
大いに語ろう会(塚崎さん)
於:イグナチオホール。松村神父様ご参加。
別途、チラシと参加申込書を準備。
2. 11月14日(土)バスツアー
訪問先: 赤穂教会、日生、閑谷学校、
備前焼窯元(柁木)
松村神父様ご参加・他の神父様にもお声をかける。壮年会会員以外の方の参加、大歓迎。
別途、チラシと参加申込書を準備。
3. 11月22日(日)13:00~16:00
黙想会(亀田さん)
於:主聖堂&イグナチオホール。
松村神父様ご参加。壮年会会員以外の方の参加、大歓迎。
別途、チラシと参加申込書を準備。

📖 青年会

10月11日(日)12:30 定例会(助任司祭室)
内容:練成会の打ち合わせ
10月25日(日)13:30 定例会(助任司祭室)
※教会清掃当番に当たっている為
内容:「チャリティーバザー」の打ち合わせ・
分かち合い

📖 教会学校

10月3日(土) 運動会
10日(土) 通常
11日(日) 子どもと共に捧げるミサ
ジーザスキッズクラス
17日(土) バザー準備
24日(土) ホールミサ 於:イグナチオホール
母親クラス
31日(土) お休み



📖 社会活動部

次回連絡会: 11月6日(金)10時ミサ後



《 お知らせ 》

★社会活動部より★

- 10月7日(水) 10:00 手芸の集い 第1・2会議室
どなたでも参加ご自由です。
- 10月10日(土) 10:00 炊き出し イグナチオホールお台所
小野浜グラウンドにて配食や、おじさんたちとのお話し相手だけでもOKです。
- 10月18日(日) 9時ミサ後 ミニバザー イグナチオホール
お弁当、食料品、手作り作品等の販売。
- 10月25日(日) 14:00 シナピス定例会 垂水 or 北須磨教会
※ 佐用プロジェクトが開始されました。詳しくは大阪教区のお知らせをご覧ください。



教会学校からのお知らせとお願い

教会学校ではエコキャップ(ペットボトルのキャップを集めリサイクル)運動に参加しています。

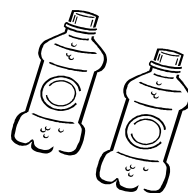
ペットボトルのキャップが一般のゴミに混ざると焼却時にCO₂を発生します。また、埋め立て処分されると土壌を汚染し、地球環境破壊につながります。

キャップを分別回収し再資源化を促進することにより地球環境を改善することができます。また、キャップの売却益で世界の子どもたちにワクチンを届けることができ、命を救うことができます。教会学校はこの二つのテーマをシンボルにエコキャップ運動を展開しています。

教会でペットボトルを処分する際には、キャップを燃えないゴミへ捨てるのではなく教会学校が準備しましたコンテナへ(ゴミ置き場横、階段の下に設置)お入れ下さい。よごれのあるものは綺麗に洗い、水気を拭いてお入れ下さい。詳しくはゴミ置き場の掲示をご覧ください。

また、ご家庭でもキャップを収集頂き教会学校のエコキャップ運動にご協力頂けましたら大変ありがたいです。

ご協力のほど宜しくお願い致します。



2009年度カルカッタ体験学習報告

助任司祭 片柳 弘史

週報でもお知らせした通り、8月24日から9月1日までインドのカルカッタを訪れ、マザー・テレサが創立した「神の愛の宣教者会」の施設でボランティア体験学習を行いました。六甲教会の信徒4名、未信者1名とわたしの計6名での旅でした。六甲教会の皆様のご理解とお祈りによって支えられたこの旅の中で神様からいただいた恵みを少しでも皆様と分かち合いたいと思い、簡単な報告書を書かせていただくことにしました。



1. 出発までの経緯

そもそもこの旅の出発点になったのは、15年前のわたしとマザー・テレサとの出会いでした。1994年、これからどうやって生きていったらいいのかと悩んでいたわたしは、ふとしたきっかけからマザー・テレサの住むカルカッタへと導かれ、彼女との出会いを体験したのです。

初めて彼女と出会ったときのことは、今でもはっきり覚えています。事務室のドアから出てきたマザー・テレサの小柄で腰の曲がった姿、深い皺をきざんだ顔に浮かんだ笑顔を見たとき、わたしの心は言いようもないほどの喜びで満たされました。心の底からあたたかいものがどンドンあふれ出し、もうじっとしてられないほどの喜びでした。

この人のそばにいたらきっと何かがつかめるに違いないと直感したわたしは、その後、紆余曲折をへながらも1年ほどカルカッタに滞在し、彼女が始めた「死を待つ人の家」でボランティアとして働くことにしました。この1年

間の体験がわたしの人生を大きく変え、わたしを司祭職へと導いてくれたのです。

このような人生を変える体験、本物の信仰と出会う体験を六甲教会の信徒の皆さんにも味わってほしい、今回の旅はわたしのそのような思いから始まりました。

2.カルカッタでの活動

カルカッタでは、基本的に午前中は「神の愛の宣教者会」の本部修道院でミサにあずかった後、それぞれの施設でボランティアをし、午後は市内に点在するマザー・テレサゆかりの地を訪ねて周るという日々を過ごしました。ボランティアの休日である木曜日には、カルカッタ郊外にあるハンセン氏病患者さんたちのための施設を訪問しました。最初の日と最後の日は、本部修道院の1階にあるマザーのお墓の前でミサを立てました。

(1)ボランティア

午前中のボランティア活動は、数人ずつ違う施設で行いました。参加者のうち30代の女性2人は、親のいない幼い子どもたちのための施設である「シシュ・ババン」(子どもたちの家)で働きました。20代の男性、40代の女性、60代の男性、あわせて3人は障害をもった子どもたちの施設である「ダヤ・ダン」で働きました。わたし自身は、15年前に働いていた「死を待つ人の家」で働きました。

(2)マザーの足跡を訪ねる

ある日の午後、わたしたちは本部修道院から歩いてマザーの足跡を辿りました。マザーが長年教師として働いたロレット修道会の学校、初めて入ったスラム街、修道院を出て間借りした家など、すべて本部修道院から歩いて1時間以内のところにあります。歩きながら、カルカッタの人の多さ、雨で水浸しになった道路、あちこちにゴミが落ちている非衛生的な環境などを実感し、改めてマザーの偉大さを思いました。

3.マザー・テレサは生きている

カルカッタに夜中の2時に着いたわたしたちは、翌日、本部修道院を訪ね、まずマザーの墓参りをすることにしました。わたしにとっては、マザーが帰天して以来この12年、待ちに待った墓参でした。

本部修道院1階のマザーの墓のある部屋に入ったとき、わたしは初め、ためらいがちに少し離れたところから白くて大きなマザーの墓石を見ていました。ですがしだいに体が墓に引き寄せられていき、気がつくやうに墓前に跪いていました。

跪いて祈り始めた瞬間、わたしの全身を大きな喜びが揺さぶりました。心の奥深いところからあたたかいものがどンドン湧き上がってきます。それは、15年前にマザーと初めて出会ったときに感じたのとまったく同じ喜びでした。そのことに気づいたとき、わたしは「マザー・テレサは生きている。死んでなどいない」ということを全身で実感しました。

この喜びは、カルカッタにいる間中ずっと消えませんでした。毎日、マザーの墓に触れるたびに大きな喜びと力が身体を満たしていくのを感じました。「死を待つ人の家」で患者さんたちの世話をしているときも、ここにマザー・テレサがいるということを強く感じ、喜びと力で満たされました。

そして、不思議なことですが、日本に帰った今もその喜びは消えることはありません。白くて大きなマザーの墓のひんやりとした手触りを思い出すたびに、「死を待つ人の家」の患者さんの枯れ木のように痩せた腕のぬくもりを思い出すたびに、あの喜びと力がわたしの心を満たしていくのを感じます。生きているマザー・テレサが、いつも一緒にいてくれるような感じがするのです。「復活」というのは、こういうことなのかもしれません。

4.身近なところにカルカッタはある

マザー・テレサは「カルカッタはあなたの身近にあります」と言っていました。今のわたしにとってこの神戸の地こそがマザーと、そしてイエス・キリストと出会うべきカルカッタなのだと思います。神戸にも、神様の愛を求めて苦しんでいる人はたくさんいます。イエスは、彼らの中でも苦しんでいるのです。心に湧き上がってくる喜びをその人たちと分かち合い、神様の愛を伝えていくことこそ今のわたしに与えられた使命なのだと思います。まだまだ

未熟な司祭で信徒の皆様にはご迷惑をおかけしますが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、教会予算からお預かりしたものの、信徒の方々からお預かりした御志を、「神の愛の宣教者会」総長シスター・プレマに手渡してきたことをご報告いたします。このお金は、シスター・プレマを筆頭とする4,900人の「神の愛の宣教者会」修道女たちの活動のために役立てられます。皆様、どうもありがとうございました。



★現在、助任司祭室にてわたしがカルカッタで撮影してきた写真を50点ほど展示しています。興味のあるかたは、ぜひご覧ください。また、カルカッタでの活動の詳しい様子はわたしのブログ「道の途中で」

(<http://d.hatena.ne.jp/hiroshisj/>)でも紹介しています。

4.参加者の声

(1)川崎さん

今回、片柳神父様のお誘いにより、長年の夢だったカルカッタへ行くお恵みが与えられました。

カルカッタに着いて、まず驚いたことは本当に多くの路上生活者がおられるという事です。それも、その多くは家族でした。小さな赤ちゃんや子供達が、私達が歩く歩道の端で粗末な布を1枚敷いた上で寝ているのです。その様な状態が街中に溢れていました。マザーの本でしか知らなかった世界を実際に五感を通して感じましたが、私自身、本当に何とかしてあげられないのかと強く思いました。

神の愛の宣教者会(通称マザーハウス)では、私は「シュシュババン」という障害児の施設で3日間ボランティアをしました。親のいない、捨てられた子供達がほとんどでした。私は1～2歳の重度の障害を持っている子供達の食事介助やオムツ交換、リハビリなどを行いました。みんな本当に可愛く、笑顔に溢れていました。短期間しか関われませんでした。私はその子供達の幸せを願わずにはいられませんでした。

1週間の滞在にて本当に多くの体験をしました。1つ強く感じた事がありました。マザー・テレサは1997年に亡くなりました。マザーハウスにはお墓もあります。でもマザーの意志を引き継いだシスター達は今も変わらず活発に貧しい人々に神の愛を伝えています。そして世界中から多くのボランティアの人たちが今も訪れます。私は小学生の時に目の前でマザーとお会いしましたが、その時に感じた独特の柔らかい包まれるような空気を今このマザーハウスでも感じたのです。この感覚をあえて言葉にするなら「マザー・テレサは生きている」となるのでしょうか。

1週間の滞在は短く、もっともっと知りたい事がたくさんあります。機会があったら是非また訪れたいと思っています。

(2)セシリアさん

この体験学習で初めてコルカタを訪れました。テレビや映画で街の様子のイメージは持っていましたが、実際はもっと強烈でした。街にあふれる人々、鳴りやまない車のクラクション、整備されていない凸凹の道、そしてそこで煮炊きして生活する人々。すべてが今まで訪れたどの街よりも、強烈な印象を与えられました。コルカタを訪れてみて、このようにすべてが混沌としているこの街で、一人から救おうと考えるのは通常ではあきらめてしまう途方もないことであることがよくわかりました。それをあきらめず、マザーは一人の命を救うことから始められたのです。マザーが一人で始めた活動は今や全世界で五千人の修道者、多くのボランティアを集め、数多くの施設を造り、活動はさらに広がっています。その施設の一つである子供の家でボランティアをして感じたことは、マザーの思いは多くの人の心にあり、マザーはこの街では生きておられるということです。今回の研修旅行の参加にあたり困難がありましたが、片柳神父様はじめ多くの方の支えと祈りによって参加することができました。また滞在中も体調を崩すことなく、貴重な体験を得ることができました。ありがとうございました。

はじめに

片柳弘史神父からのお誘いでマザー・テレサゆかりの地、インドのコルカタを訪問した。

コルカタでの滞在期間は2009年8月25日(火)から8月30日(日)。短期間ではあったが片柳神父の適切なアレンジによって、早朝のミサ・夕べの祈り・ボランティア活動・マザー関連施設訪問・市内散策・ショッピングなど盛りだくさんのメニューが生まれ充実した「インテンシブコース」であった。

8月26日はマザーの誕生日。6:00からのミサはコルカタの大司教によって執り行われ報道関係者も取材に来ていた。

以下に私の印象に残った点を記す。

1. 若者たちへ敬意

世界中から多くの若者たちがボランティア活動に参加していた。その中で大学生を中心とする日本の若者たちが最も高いシェアを占めていた。彼らはインド旅行の一行程としてきた人、マザー関連施設でボランティアのみを目的としてきた人などその動機はさまざまである。殆どの方はクリスチャンではない。彼らのうち何人かと話す機会があった。みな一様にまじめに人生を考えボランティア活動を通して自分の存在感を確認しているように思えた。一方、現在の日本の若者の中には目を覆いたくなるような言動をとる人たちも多い。「いまどきの若者は・・・」(年配者が良く使う言葉で私も同調することが多い)と愚痴らざるをえないが、マザー関連施設でボランティア活動してる若者たちを見ていると日本の将来に一縷の希望が持てる。

六甲教会においては教会学校のリーダーたちが子供たちのお世話に心血を注いでくれている。また、最近では中高生会、青年会の人たちも積極的に教会行事に参画してくれていることは大変喜ばしい。彼ら若者は六甲教会の宝物である。私たちには人生の先輩として彼らを温かく見守り、場合によっては厳しく導いて行くという使命がある、と思う。

2. ボランティア活動の意味

片柳神父は次のように語られた。

「10数年前に死を待つ人の家」でボランティア活動をしていた。そのときには、つまるところ自分のためにやっていた。しかし今回はマザーと同じように貧しい人の中に神を見ることができた。自分を神に捧げすべてはイエスの胸の中にあると考えるとき心が澄み渡る」

ところである友人が、人の行為には、

- ① 自分が満足感を得ることを第1の目的とした行為
- ② 自分に利益が帰ってくることを目的とした行為
- ③ 他人を愛すること(のみ)を(純粋に)考えて行う行為(結果的に自分に喜びをもたらし自分の成長に役立つ)

があると指摘してくれた。①はエゴイズムである。しかし②もエゴイズムに通じる。ボランティア活動と言うのは自分の領域をしっかりと確保しつつ余力を他人に提供しその結果自分も喜びを覚えるものである。



<マザーテレサの勉強会に集う日本の若者たち(マザーハウス1階)>

今回マザー関連施設(具体的にはダヤ・ダン、障害を持った子供たちを収容している施設)でボランティア活動をしてみて他人のためになっているという喜びを感じることができた。私の場合はいわば②と③の中間くらいのところであろうか。

私は③に徹する、ひいては貧しい人たちの中に神を見ると言った高度の領域には程遠い存在である。しかし、少しでも③に近づくよう努力は継続したい、と思っている。

3. 騒音の中でのミサ

Missionaries of Charity (マザーテレサ修道会本部、通称マザーハウス、略称 M.C.)は交通量の多い通りに面した建物。ここで毎日早朝のミサやタベの祈りが行われる。私は自動車の通行音やクラクションが耳に障ってミサに集中できなかった。しかし司祭やシスターたちはなにくわぬ様子でミサに集中できているように見える。マザーが修道院の中での生活や上流階級の生徒が通う閑静な学校の先生をやめて市中の貧しい人たちの中へ飛び込んでいったことを考えれば、マザーハウスで騒音に取り囲まれて行われるミサはマザー好みと言えるであろう。



<交通量の多い道路に面したマザーハウス

(1階はマザーの墓所、通常ミサは2階で行われる)>

4. ボランティア活動と行政対応

コルカタの市中で多くの路上生活者や物乞いをする子供たちを見かけた。この人たちを見ているとマザーの施設に収容されている人たちは社会的な支援を必要としている人たちのごく一部で大変恵まれている、と思う。彼らがどのような基準で選別されているのかよくわからない、興味深い点である。ボランティア活動の対象となるのはいつも社会的問題の一部であり部分分解にしか過ぎない。全体解を解くには政治的・行政的対応が必要である。しかし後者は国家や自治体の政治権力構造・経済力に左右される。コルカタのような社会でいきなりこのようなことを求めても所詮犬の遠吠えになってしまう。

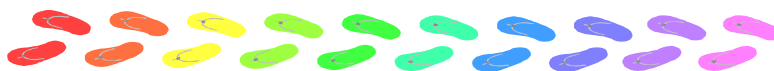


<コルカタの市中の路上生活者>

それよりは「一滴のしずく」に過ぎない活動が積み重なって雨のように降りそそげば・・・と思う。ボランティア活動が行政の怠慢につながることはないように、むしろ行政の自覚を促すことになればと願うばかりである。

おわりに

「インドへ行く」という意思決定は私が下したものである、と考えていたが、ひょっとしたらイエスやマザーが私をインドへ導いてくれたのかもしれない。人間の意思決定というものは、DNAや環境から自由になり難いと考えていたが、「神の意思」からも自由になれないのではないか。近代人は自我を強調し、神から自由になろうと試みる悲しい存在かもしれない。



10月の予定

		教会暦	教会行事
1	木	聖テレジア(幼いイエスの)おとめ教会博士	
2	金	守護の天使	7:00 10:00 初金ミサ
4	日	年間第27主日	13:00 侍者会 17:00 海星病院ミサ
7	水	ロザリオの聖母	
9	金		10:00 祈りの道場 (15:00 ミサ)
10	土		9:30 教会大掃除
11	日	年間第28主日	10:15 小教区評議会 17:00 海星病院集会祭儀
15	木	聖テレジア(イエスの)おとめ教会博士	
17	土	聖イグナチオ(アンチオケ)司教殉教者	
18	日	年間第29主日 世界宣教の日	12:15 大いに語ろう会(壮年会) 17:00 海星病院ミサ
19	月		14:00 三日月会ミサと例会
24	土		10:30 哲学講座 14:30 教会学校ホールミサ
25	日	年間第30主日	17:00 海星病院集会祭儀
26	月		11:00 ベビーとママの集い
28	水	聖シモン 聖ユダ使徒	



広報部員のつぶやき

先日三宮のとあるギャラリーで聖書版画家渡辺貞雄さんの個展をみました。その中に、ひときわ心に残る作品がありました。「復活の朝」。イエスの墓へ向かう3人の女性。待ち受ける「復活」を知らないはずの女性たちからは不思議と緊張感が漂っています。ただ黒い線だけで表されているのに、この世で最も静けさと光に満ちていたであろう崇高な朝を感じました。

キリスト教がその作品のテーマでなくても、絵画・映画・演劇など、ふとそこに神を感じ、驚き、感動することがたびたびあります。芸術の秋です！

♪FadA♪

<p>教会報11月号の発行は、11月1日(日)です。 編集会議は10月25(日)です。 記事原稿は、10月18日(日)正午までに信徒会館 受付へご提出願います。 (広報部)</p> <p style="text-align: center;">http://www.rokko-catholic.jp</p>	<p>カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会</p> <p>〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21</p> <p>電 話 078-851-2846</p> <p>発行責任者 松村信也 神父</p> <p>編 集 広 報 部</p>
---	---